

特集 呼吸管理 —上級編 2020—



編集責任

横須賀共済病院集中治療科

磨田 裕 USUDA, Yutaka

本誌のメイン読者である臨床工学技士は、人工呼吸器をはじめとした、臨床現場で使われている多くの医療機器の保守管理を担っている。医療の進歩に伴い、医療機器自体も高度化・複雑化し、その保守管理を行う臨床工学技士への期待と責任は、年々増加している。本誌では呼吸領域についての特集を毎年お届けしているが、今回、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) など重症患者管理における呼吸療法の重要性が再認識されたこともあり、今号では、呼吸管理における一歩踏み込んだ上級編の特集をお届けする。

ICU や呼吸療法サポートチーム (RST) として呼吸領域の業務に携わる臨床工学技士には、最新の知見を得て、知識・技術をアップデートすることが求められている。また、RST では多職種と連携して業務に当たるため、各職種の専門性についても理解することが必要である。

本号では、古典的な換気モードの1つであるものの、使用頻度が高い圧規定換気 (PCV) について鍋島正慶先生にご執筆いただいた。PCV が選択される理由の1つに患者—人工呼吸器の同調性が優れている点があげられるが、本号では、「同調性が優れる理由」について改めて解説いただくとともに、PCV であっても非同調になる可能性があることを踏まえた注意点についても述べられている。さらに、よく使用される PCV で「日常よく遭遇する異常」に対してもアルゴリズムを用いて解説いただいております。これらを「深掘り」して理解できれば、さらに一歩進んだ呼吸管理に貢献していただける

と思われる。

平澤 純先生には、理学療法士の視点から、昨今、有用性が示されている早期リハビリテーションについて、臨床工学技士のかかわりを踏まえご執筆いただいた。人工呼吸管理中の患者にも実施されるリハビリテーションでは、理学療法士を中心にした医師、看護師、臨床工学技士による多職種の連携が重要である。そのなかで、臨床工学技士に求められること、できることは何か、「深掘り」してほしい。

臨床工学技士の相嶋一登先生、道越淳一先生には、「非挿管患者における呼吸モニタ」と「気管チューブカフと自動カフ圧コントロール装置」について、それぞれご執筆いただいた。相嶋先生の稿を読むと、「なぜ非挿管患者に呼吸モニタが必要なのか」という根本を理解したうえで、さらに実際に使用されているモニタについての知識をアップデートできると考える。道越先生の稿では、カフの形状、材質、大きさ、厚さなどの違いによるシール能力について、実際の測定結果を元に述べられている。カフのシール能力は VAP 予防に重要であり、またそのようなデバイスについて他職種に提案することも臨床工学技士の重要な役割であることから、大変参考になる。

本号で得た知識・技術を、明日からの臨床に役立ててほしい。

最後に、COVID-19 で厳しい医療状況のなか、非常に限られた時間にもかかわらず、ご執筆いただいた先生方に、この場を借りて深く御礼申し上げます。